

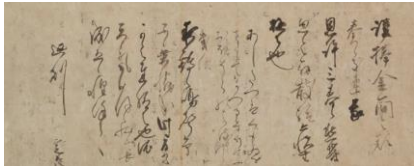
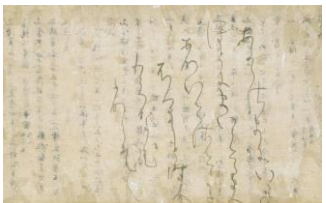


## 平成29年度購入文化財一覧

### 【東京国立博物館】(計11件)

- 1 ○種 別 絵画  
○名 称 正月飾り物図(しょうがつかざりものず)  
○作者等 酒井抱一(1761~1828)俳賛、鈴木其一(1796~1858)、鈴木蠣潭(1782~1817)、大西椿年(1792~1851)、山崎鯉隠(1785~1854)、長橋文桂(?~1830)各筆  
○時代 江戸時代・文化13年(1816)  
○品 質 紙本墨画淡彩  
○員 数 1幅  
○寸法等 本紙 縦95.9cm 横27.7cm  
○作品概要 掛幅装。陶軸。正月に飾る縁起物である羽子板、米俵、雑器(正月の神棚に供物を盛る木製の皿)、若松と、干支を示す鼠人形を、鈴木蠣潭(1782~1817)、鈴木其一(1796~1858)、長橋文桂(?~1830)、大西椿年(1792~1851)、山崎鯉隠(1785~1854)ら5人が寄合描きしたもの。上部には酒井抱一(1761~1829)が自らの俳諧を着賛している。
- 
- 購入金額 4,200,000円
- 2 ○種 別 絵画  
○名 称 日課観音図(にっかかんのんず)  
○作者等 酒井抱一(1761~1828)筆  
○時代 江戸時代・文政7年(1824)  
○品 質 絹本墨画  
○員 数 1幅  
○寸法等 本紙 縦75.5cm 横26.8cm  
○作品概要 掛幅装。牙軸。文政7年(1824)5月朔日(1日)から6月にかけて33日かけて毎日1幅ずつ、合計三十三観音を描いたものの一つで、画面右下の墨書「十五日」より5月15日制作のものとなる。鎌倉寿福寺に伝来した伝源実朝筆「日課観音図」(現在福岡市美術館ほか分蔵)に倣い執筆したもの。表装は描表装で、抱一の弟子である池田孤邨による。
- 
- 購入金額 8,200,000円
- 3 ○種 別 書跡  
○名 称 書状(しょじょう)  
○作者等 藤原定長(1149~95)筆  
○時代 平安時代・文治2年(1186)  
○品 質 紙本墨書  
○員 数 1幅  
○寸法等 本紙 縦28.8cm 横71.4cm  
○作品概要 掛幅装。二紙を継いだ横長の料紙に藤原定長の書状を書く。文治元年に定家が喧嘩を起こして、後白河院から宮中の出入りを止められたことについて、父俊成が後白河院の近臣であった定長に手紙を送って執り成しを請うたことに対する書状である。天皇の下した和歌を引用し、許しがあつたことを伝えている。定家の日記『明月記』の紙背であったが、後に相剥ぎされて伝わってきた。なお、俊成の書状は香雪美術館が所蔵しており、平成28年に重要文化財に指定されている。
- 
- 購入金額 16,200,000円
- 4 ○種 別 書跡  
○名 称 仮名消息(延喜式紙背)(かなしょうそく(えんぎしきしはい))  
○時代 平安時代・11世紀  
○品 質 紙本墨書  
○員 数 1幅
- 

- 寸法等 本紙 縦29.0cm 横45.2cm  
 ○作品概要 掛幅装。牙切軸。当館所蔵国宝「延喜式」の巻第20の紙背にあたる仮名消息である。背面に薄く透けて見えるのが「延喜式」の本文。当館に蔵される以前に相剥ぎされ伝来した。「延喜式」巻第20には、長元3年(1030)の年号を持つ紙背文書があり、この仮名消息も長元年間をあまり隔たらない時代に書写されたものと考えられる。のびやかで流麗な連綿が数文字にわたって続く。実用の美ともいえる闊達な仮名である。
- 購入金額 29,600,000円

- 5 ○種別 彫刻  
 ○名称 能面 三番叟（黒色尉）（のうめん さんぱそう（こくしきじょう））  
 ○指定 重要文化財  
 ○作者等 伝日光作  
 ○時代 南北朝時代・14世紀  
 ○品質 木造、彩色  
 ○員数 1面  
 ○寸法等 縦16.5cm



- 作品概要 翁舞で翁（白色尉）の次に登場し、五穀豊穰を祝って舞う時に着ける。頭部頂上に冠形を表し、顔一面に皺を刻む。目をへの子にして歯の抜けた口を開けて笑う。品の良い翁（白色尉）に対して、三番叟は粗野あるいは滑稽な表情が多いが、この面は比較的上品である。
- 購入金額 54,000,000円

- 6 ○種別 彫刻  
 ○名称 能面 伝山姥（のうめん でんやまんば）  
 ○指定 重要文化財  
 ○作者等 伝赤鶴作  
 ○時代 南北朝時代・14世紀  
 ○品質 木造、彩色  
 ○員数 1面  
 ○寸法等 縦20.7cm



- 作品概要 頭髪を中央で左右に振り分け、毛筋が乱れる。高眉を刷く。眉間に皺を寄せ、瞳は金色（銅板鍍金製）、白目は赤く塗る。口を大きく開いて上歯と歯茎を露出する。広葉樹の木心をこめた材を用い、彫りの深い顔の造作が特色である。山姥として伝わっているが、容貌は定型の山姥と大きく異なる。また、顎には植毛した孔を埋めた痕跡がある。髭のある悪尉面を改作した可能性がある。
- 購入金額 54,000,000円

- 7 ○種別 漆工  
 ○名称 須磨浦蒔絵沈箱（すまのうらまきえじんばこ）  
 ○時代 室町時代・15～16世紀  
 ○品質 木製漆塗  
 ○員数 1合  
 ○寸法等 縦11.8cm 横9.6cm 高6.7cm



- 作品概要 沈箱は香木や香木片を収める箱。この沈箱は木瓜形で、蓋に甲盛と塵居を設けた被蓋造の箱。身の内には懸子を1枚収め、身の長側面に金銅製千鳥形座の紐金具を打つ。蓋表には、研出蒔絵と薄肉高蒔絵に付描や描割、銀平文を交えて、千鳥が飛び交い、塩屋が並び、小舟の停まる浜辺を描いている。蓋鬘と身の側面には、研出蒔絵により千鳥の群れ飛ぶ様子を描き、懸子の見込にも洲浜に松、千鳥の図柄を描く。蓋表の図柄は、海で魚や貝をとり、藻塩を焼くことを業とする海人を暗示しており、また千鳥が飛び交う様子も描かれることから、海人や千鳥を景物として詠まれることが多い歌枕「須磨」を表わしたものと解される。
- 購入金額 27,600,000円

- 8 ○種 別 漆工  
 ○名 称 色紙短冊蒔絵歌書箱（しきしたんざくまきえかしよばこ）  
 ○時 代 江戸時代・17世紀  
 ○品 質 木製漆塗  
 ○員 数 1合  
 ○寸 法 等 縦27.7cm 横20.8cm 高8.0cm  
 ○作品概要 わずかに甲盛をもうけ、底板に指孔を穿った、長方形の深い被蓋造の箱。現在は別に収納するが、元来は身の内に「左大将家歌合」（「六百番歌合」）4冊を収める。  
 総体を梨子地として、蓋表から蓋鬘、身の側面にかけて、金・銀・青金の薄肉高蒔絵を主体に付描や描割を駆使し、金・銀の切金を交え、色紙や短冊、葵紋を表わす。蓋表中央には銀平文で「左大将家歌合」の題字を記しており、色紙や短冊には柳橋蛇籠、梅に鶯、岩に松、菊水、流水楓、秋草、貝藻など四季の草花や景物が精細に描かれている。
- 購入金額 14,920,000円
- 
- 9 ○種 別 染織  
 ○名 称 小袖 白綸子地梅樹竹垣模様（こそで しろりんずじばいじゅたけかきもよう）  
 ○時 代 江戸時代・18世紀初  
 ○品 質 綸子（絹）に刺繍、型染、描絵  
 ○員 数 1領  
 ○寸 法 等 身丈157.0cm 衿62.5cm  
 ○作品概要 卍繫ぎ蘭菊文を地紋に織りだした白い綸子地に、刺繍・型染などによって模様を全身に表わした小袖である。裏地には紅絹を用い、表地と裏地の間に薄く真綿が入る。刺繍は、紅と萌黄の釜糸（精練した無撚りの絹糸）で主として平繡・纏り繡で梅樹、竹などを表わす。さらに撚糸による駒繡で梅花の輪郭、蕾などを刺繍する。模様の一部は茶と紺の型染による摺匹田で染められ、また、梅花の内部を藍鼠色に染めている部分も見られる。垣は「かちん」と称される濃い墨色でくっきりと手描きされる。刺繍・摺匹田・かちんなどの技法で吉祥模様や王朝風の意匠を施した総模様の小袖は、いわゆる「元禄小袖」と呼ばれ、元禄期（1688～1704）に流行したデザイン様式である。小袖模様雛形本『当流七宝常盤ひいなかた』（元禄13年刊）、『花鳥雛形』（元禄16年刊）にも類似する模様の様式を持つ小袖模様が見られる。
- 購入金額 3,500,000円
- 
- 10 ○種 別 考古  
 ○名 称 変形五獣鏡（へんけいごじゅうきょう）  
 ○作 者 等 出土地不詳  
 ○時 代 古墳時代・4～5世紀  
 ○品 質 青銅製  
 ○員 数 1面  
 ○寸 法 等 面径13.1cm；重量336cm  
 ○作品概要 古墳時代の倭鏡（日本列島製）。内区は五匹の獣像が向かい合い、その外側に擬銘帯がめぐる。外区は、内側から鋸歯文帯、複線波文帯、鋸歯文帯が配置される。獣像の頭は神像に由来するもので、神像と獣像表現に混乱がみられる。文字と図像が理解できなかった倭系工人が製作した倭鏡の特徴をよく示す。Z字形に胴をくねらせ、半球形の頭をもつ獣像の形や外区文様帯の構成から、4～5世紀の鏡と判断できる。
- 購入金額 1,900,000円
- 
- 11 ○種 別 東洋陶磁  
 ○名 称 青花人物文長方合子（せいかじんぶつもんちょうほうごす）  
 ○作 者 等 中国・景德鎮官窯「大明隆慶年造」銘  
 ○時 代 明時代・隆慶年間（1567～72）
- 

- 品 質 磁製
- 員 数 1 合
- 寸 法 等 縦 15.0cm 横 24.0cm 高 8.7cm
- 作品概要 夾雑物を多く含んだ硬質の白磁胎。胎は厚く、重い。畳付きを残して総釉、ところどころ釉の剥落、いわゆる「虫喰い」を生じている。四方を入隅形とした長方合子で、蓋裏と身の底に木製漆塗りの蓋物を模して2本ずつ棧を表わしている。コバルトによる下絵付けは硬い筆致で、蓋表に女性の図と、蓋・身の側面の長辺には火炎宝珠をはさんで向き合う2頭、短辺にはそれぞれ1頭の五爪の龍を配する。コバルトは黒色がかった発色である。底の中央には二重円に楷書で「大明隆慶年造」青花銘を表わす。
- 購入金額 37,800,000 円